

Se a me vieni

se a te non torno

e qual conforto.

— Giuseppe TARTINI —

もしあなたが私のもとに来ないなら

もし私があなたのもとにもどらないなら

いかなる安らぎがあろうか

遥かなる 歌

この聖堂を訪れるすべての人に捧げる

初夏を思わせる日差しが、小さな広場に満ちていた。そのくせ、風は少し冷たくて、道行く人の白いブラウスを軽やかに煽っていた。

青年は、長い間その広場の一角に腰を下ろして、ぼんやりと広場の雑踏を見つめていた。手には、白い絵の具を含ませた絵筆。

「綺麗ね。」

「ルノワールみたい」

十四、五才の少女たちがそんな会話を交わしながら、ゆつくりと傍らを通り過ぎて行く。

青年は少女たちの去っていった方向を、見るともなく見つめていた。

「すみません。」

落ち着いた声が、青年の意識を主のもとへと呼び戻した。貴婦人の声だった。

「これ、くだらない？」

薄いレースの手袋をはめた手が、並べられたカンヴァスの中の一枚を指差す。

「とても気に入ったの。」

「え・・・あ・・・はい。」

青年は少なからず狼狽して、示された絵を取り上げた。それは青年の絵にしてはめずらしく、全く人物の入らない風景画だった。

「これ・・・ですね」

「ええ。そうよ。——あなた、あまり商売に馴れていらつしやらないのね？」

婦人がぐすくすと笑う。

「はあ・・・ほとんど売れないので・・・」

青年は見事な黄金の髪にくしゃつと左手を突っ込んで俯いた。本当に。こんな身分の高そうな、品の良いご夫人に買ってもらえるなんて。

「まあ。謙遜ね。」

婦人は微笑みを崩さないまま、他のカンヴァスに視線を落とした。青年にとつて、居心地の悪い時間が過ぎてゆく。しばらくして、婦人はその好意的な瞳を青年に向けて言った。

「風景に人物が入っているものが多いのね。肖像画は？」

「あまり・・描いたことがありません。それと風景画も。」

「勿体無いわ。こんなに素晴らしい風景が描けるのに。」

顔にかかるペールをそつと払つて、婦人は絵を見つめ直す。誰も居ない、古都和運河。

「そうね・・。この絵にも何かが足りない。やはり誰か人がいた方が良くのかも知れない。——でもこの絵に入れるだけの人がいない・・そんな感じね」

それがこの絵の良いところだけれど、と付け加えて、婦人は笑つた。

「実は・・初めはいつも風景画のつもりで描いているんです。でも描いているうちに、やつぱり何かが足りなくて・・たまらなくなつて人を入れてしまふんです。失敗するのは判つているんだけど、どうしても我慢出来

なくて・・。」

「まだ学生さんなの？」

「いいえ。・・この間まで学生だったんですけれど、お金がないのでやめました」

婦人は、ちよつと驚いたように青年を見た。けれど、青年にとつて——いや、青年のような階級の人間にとつて、学費がないために学校をやめることなど日常茶飯だった。たとえ二年でも、学校に行けた自分は幸せだ、と青年は思う。けれどこれは、婦人のような階級の人間に言つても理解出来ない感情に違いなかつた。

「そう・・。頑張つて下さいね。あなたは素敵なものを持っているから。そうだわ、自画像を描かれたらいかが？きつと売れると思うのだけれど」

「え・・？」

話の脈絡を掴み切れずに、青年が戸惑つたような表情を浮かべる。婦人は微笑まじげに笑つた。

「モデルがとても素晴らしいから。きつと素敵な自画像になると思いますよ」

青年の名はミロといった。サヴォナローラという姓は両親のものではない。それどころか、ミロは両親の顔さえ知らなかった。

ミロを育てたアンドレア・サヴォナローラ神父は、親を恋しがる幼いミロに、彼が知る唯一の母親の姿を語って聞かせた。十一月八日の夜更け。ミロにそっくりな美しい女性が、生まれたばかりのミロを抱いて教会に倒れ込んで来たのだと。長い髪は纏れて頬に張り付き、体は弱り切つて痩せ衰えていたが、高貴な生まれを思わせる気品を備えた美しい女性だった。

美しいエメラルド・グリーンの瞳を上げて、彼女は必死な声で神父に告げた。『この子を守ってほしい』と。

医者と呼ばうとする神父の袖を引いて、彼女は懺悔をさせて欲しいと頼んだ。死が間近に迫っていることは、彼女にも解っていた。手を組んで瞳を閉じ、彼女はぼつりぼつりと語り始めた。親の決めた婚約者が居るのに、貧しい画家と恋におちてしまったこと。家を抜け出し、駆け落ちして画家と一緒にになり、ミロを身籠つたこと。

父の怒りに触れ、画家が彼女をかばつて死んだこと。おなかに居るミロを守るため、必死にここまで逃げて来たこと――。

神父が祈りを終え、胸に十字を切つた時、彼女は既に息絶えていたという。

その日から、ミロは神父の子として育てられた。ミロが十五になった頃には、ミロのような子供が後に七人も続いていた。これ以上、神父の世話になる訳にはいかない。ミロは教会を出る決心をした。

両親の話聞いた時から、ミロは画家になりたいと思うようになつていた。たつた一枚でもいい。父と母の激しい恋を凌ぐ程の、劇的な絵を描いてみたい。

しかし教会を出て七年が過ぎても、それ程までに心を揺り動かす対象にはめぐり合えなかった。日々の生活に追われる身では、誰かに心奪われる時間のある筈もなかったのだ。

ミロはカンヴァスを持って森を歩いていた。貴婦人が

驚くような高値でミロの絵を買い取ってくれたので、久しぶりに日雇いの仕事を休んで絵を描いてみようと思つたのだつた。

もう少し歩くと、ぽつかりと忘れられたような湖がある。一度描いてみたいと思つていた景色だつた。

鏡面のように静まり返つた湖のほとりで、ミロはイーゼルを立てた。白いカンヴァスをその上に据える。碧く染まつた森の風景に、その白いカンヴァスは眩しい程の対照を成してミロの黄金の髪を一層引き立たせていた。

もし誰かが通りかかつたなら、思わず溜め息を漏らし、てしまいそうな、夢のような風景。けれどミロは、まだ自分がこの風景の一部になり得ることに気付いていなかった。

しばらく辺りの景色を見渡してから、ミロはいきなり青い絵の具で輪郭を取り始めた。鳥の声と、ときおり立てる風のざわめき。そんな音たちが、緩やかな時間を支配する。

ミロが再び顔を上げて筆を置いたのは、日も傾いた頃だつた。荒削りな下絵がカンヴァスの上に映し出されて

いた。目の前にある風景と全く同じの、もう一つの風景。やはり、何かが足りないと思つた。人？物？それとも――。

この絵に入れる人物がない――。そんな婦人の言葉を思い出して、ミロはくすつと笑つた。確かにそうかも知れない、と思う。ここには、きつと森の精か何かでなければ入れないだろう。

ミロは諦めてイーゼルをたたんだ。いつものことだ。

――また最後になつてどうしても我慢出来なければ、人物でも何でも入れればいい。――

その人物に愛着がない故にいつも失敗することを知りながら、ミロはカンヴァスを抱えて森を後にした。

「ミロだ！ミロが来た！」

町外れの教会の傍まで下りて来た時、ミロは数人の子供たちに飛びつかれた。

「おつと……！気を付けないと。絵の具が服に付いてしまうよ。……ノエル神父は居るかい？」

笑いながら、ミロが問う。彼等はこの町の神父が世話をしてゐる子供達なのだ。

「居るよ。呼んで来ようか？」

「とんでもない！自分で行くよ」

背の高いミロの歩みに遅れまいと、小さな足が小走りになつてミロの後を追う。ミロはつまづきそうになりながら、歩む速度を落とした。

「久しぶりだね・・・よく来てくれた」

ノエルは驚きと喜びを全身で表しながらミロを迎えた。

「子供達が、君の来るのを楽しみにしていてね。この間も今度はいつ来るのか、と問い詰められて困つてしまつたんだよ。君は子供と遊ぶのが上手いから・・・」

「僕の育つた教会を思い出すんです。ここに来ると。」

ミロはゴシックの影響が見える装飾を見渡した。明るい色のステンドグラスから、夕日が零れて部屋をオレンジ色に染めている。

「そうか・・・。いつでも来てやつて欲しい。大したもてなしは出来ないけれど——」

グラスに冷たいミント・ティーを注ぎながら、ノエルは笑つた。

「それで、今日は？見たところ、絵を描きに行つた帰りのようだけれど」

澄んだ音を立てるグラスをミロの前において、ノエルが尋ねる。

「ええ。実は、これを——」

ミロは小さい封筒を差し出した。中を一目見て、ノエルは目を丸くした。

「ミロ！これは一体——」

「絵が売れたんです。それで、今までお世話になつたお礼を、と思つて。」

ミロは心持ちはにかんで俯いた。ミロがノエルにしてもらった資金援助の額には到底及ばなかつたが、せめて気持ちだけでも表したかつたのだ。

「結局、卒業することは出来なかつたけれど、貴方のお陰で学校にも行けました。本当に感謝してゐるんです」

「ミロ・・・気持ちは嬉しいが・・・これは君の育った教会に送りなさい。きつとアンドレア神父も喜ぶ」

「送りましたよ。もう。」

ミロはにつこりと微笑んだ。

「僕の弟や妹たちと、ここの子供達とを合わせて頭割りにしたんです」

一瞬言葉を失って、ノエルはミロの青玉色の瞳を見つめた。暮らしが楽などある筈がない。この先再び絵が売れる保証だって、全くないというのに。

「優しい子だね・・・君は——」

儂い程に・・・。ノエルは胸の奥でそう付け加えた。

芸術家には不可欠と言われる繊細な神経を、ミロも確かに持っていた。しかし、そのか細い弦を引きちぎられるような衝撃に出会った時、ミロは一体どうするのだろうか。

「・・・有り難う。これは彼等が自立する時の為にとつておくよ。君の感性が、他の人に共感を与えたことの記念として。」

「そんな・・・そんな大したものではなかったんです。」

その貴婦人も、何か足りないけどそこが良いと云って買ってくれた位ですから。」

ミロが慌てて弁明する。

「失礼かも知れないけど・・・きつと彼女が変わった趣味の持ち主だったんでしょう」

「そんなに必死になつて否定することはないよ、ミロ。」

ミロの狼狽ぶりが可笑しくて、ノエルはくすくすと笑った。つられてミロも小さく笑う。

ひとしきりの談笑が終わり、再び静寂が訪れた時、ミ

ロは真摯な瞳をまつすぐに上げて言った。

「僕は・・・僕の事など何も知らない、全く別世界の人々が見ても涙が溢れてくるような、そんな絵を描いてみたんです。一生に一度でいい。すべての人の心を揺り動かさずにはおかない絵を——」

凜とした決意さえみなぎる表情を、ノエルは愛し子を見守るような瞳で見つめた。まだ何の痛みも知らない、無垢な心を。

「大丈夫だよ・・・君なら。いつか、時が来れば描けるようになるよ・・・。」

ノエルの左手の中のグラスが、またカラン、静かな音を立てた。

夕闇の中を帰っていくミロの後ろ姿を見詰めながら、ノエルは深い溜め息をついた。

時が来れば、ミロは描くだろう。万人の共感を呼ぶ作品を。けれどそれはミロの心の平安が乱される時でもあることを、ノエルは知っていた。果たしてそれがミロにとって良い事なのか、悪い事なのか。そしてその時、ミロの神経はその激動に耐え得るのか――。

神よ、どうかミロをお守り下さい。西の空に現れた星を見上げつつ、ノエルは何度も胸の内ですう呟いた。

二

その夜、外は満月だった。ミロの風景画は殆ど出来上がっていたが、矢張り納得のいくものにはならなかった。眠れない晩。ふと、森に行つてみようと思つた。これだけ月が明るければ、灯りがなくとも湖まで辿り着けるだろう。

ミロはベッドを抜け出すと、服に着替えて光の中へとすべり下りた。

月明かりの森は、まるで別世界の様だった。昼間とは全く違った風景。黒とも銀ともつかない、水の色。その水面には、丸い月が白い影を落として微かに揺れていた。

全ての音が死に絶えた夜。

ふと、ミロは風が動くのを感じた。それは木々たちのざわめきとは違う、局部的な動きだった。流れるように何者かが動いて——そして水に触れた。月が、一瞬のうちに形を失う。

——誰だろう。——

我知らず息を殺して、ミロは岸边の様子をじつと伺っていた。

突然、音が静けさを破った。予想に反してそれは声でも物音でもなく、咳き込む音だった。細い手が湖の中に伸び、銀の水をはね上げる。きらめく水滴を面と髪とに受けて、『彼』は初めて顔を上げた。

「……あつ……！」

小さな叫びがミロの喉を突く。狂おしい程の赤。水の中の両手も絹のブラウスも、全てが赤く染まって見えたのだ。突然の声にびつくりしたように、水辺の人がはつと声の方を振り返る。

——違う……赤いのは……——

髪と、稀有な二つの瞳。ミロは自分を見詰めている赤

い瞳を声もなく見詰め続けていた。

「……誰……？」

囁く様な微かな声が、目の前の赤い唇から洩れた。

「……あ……ごめん……覗くつもりじゃなかったんだけど……」

押し出すようにして、ミロは言葉を紡ぐ。自分の声すら、どこか遠くの方から聞こえているような気がする。

「散策していたんだ。そうしたら——」

ミロは口を噤んで黙り込んだ。何も喋りたくなかったのだ。ただいつまでもこの世界を見詰め続けていたい。出来るなら、永遠に。

けれど、すぐにその絵画のような一瞬は崩された。他でもない、彼の人の幽かな微笑みによって。

「……そうか……こんな所で人に会えるとは思わなかった。」

「君は何故ここに？」

ミロの問いに首を傾げるようにして、水辺の人は少し宙に視線を泳がせる。それから、ゆつくりと息をついて言った。

「君と同じ、かな」

「・・・たった一人で、こんな時間に？」

「そう。君がそうであるように。」

ミロはとつきに言葉を返せなくて、黄金の髪を何度も梳いた。絵を描くため、というの理由は理由になるだろうか？

「・・・ここに来るのは初めて？」

何気なく、ミロはそんなことを訊いてみた。彼があまりにもこの場所に相応しかったから。ずっとここに住んでいるのではないかと、そんな気さえしたのだ。

微笑みを崩さないまま、水辺の人が答える。

「——いや。最近は殆ど毎日のように来てる。何故そんな事を？」

「何故って——」

君が森の精に見えたから、とはまさか言えまい。

「僕は絵を描くために毎日ここに来ているんだ。もう殆ど仕上がっているんだけど、何か物足りなくて——」

ミロは微笑んでいる二つの瞳をじつと見詰めた。

そうだ。足りないのはこの人だったんだ。

「頼みがあるんだ。僕の絵の中に入って貰えないかな・・・」

あまりに唐突なミロの申し出に、彼は確かにびつくりしたようだった。けれどすぐに真顔に戻って、ちよつと残念そうに言った。

「済まない。私はここに來ていることを家の者に内緒にしているんだ。だから——」

赤い瞳が微かに俯く。

「でも、君の絵を見てみたい。今度はいつ此処へ？」

再びミロを見上げた瞳を見て、ミロは愕然とした。頼み、という言葉で片付けるには、あまりにも切なすぎる瞳。悲しい程の、『願ひ』——。

「——明日にでも。君の都合が良ければ、何時だつて来るよ・・・」

ミロは思わず水辺に歩み寄っていた。いつの間にか、二人の間は手を伸ばせば触れ合える程にまで縮まっていた。まだ水に濡れている細い手を取り、ミロは囁いた。

「君の名前を教えて欲しい。何て呼べばいい？」

「・・・カミュ。君は？」

「ミロ・・・」

美しい金の光の中で、二人は夢のような時を過ごした。カミュは何も自分の事は話さなかつたけれど、ミロにはそれで十分だった。昼間、光の中で見るカミュは、例えようもなく綺麗で——ミロに時の経過を忘れさせた。まるで蝶の様だと、ミロは思った。

「君の方が綺麗だよ。日の光が良く似合う」

くすくすと笑いながら、カミュは言った。

「君はもう少し太らなくちや。そんな細い体じゃ、触つたら折れてしまう」

ミロが自分の分のサンドウィッチを差し出しながら言う。

「いいよ。そんなに入らない。それよりもミロ、あの木は葡萄の木みたいだよ。実があんなに沢山成ってる」

ミロはカミュの指し示す先を見詰めた。丁度手の届く位置に、葡萄の房が下がっている。

「本当だ！待ってて。今取ってくる」

走り去って行くミロの姿を、カミュは目を細めて見詰

めていた。しなやかな身体が、風を切つて躍動する。青い瞳も長い黄金の髪も、全てが天使の祝福を一身に受けている様に見えた。いや、ミロ自身が天使なのかも知れない。こぼれる様なミロの笑顔を思つて、カミュは微笑んだ。

——やつと出会えた・・・私の天使。——

ミロといる間は、苦しみも消える。カミュはそつと胸に手を遣つた。一体、あと何度こうしてミロに会うことが出来るのだろうか。

再びカミュが彼方を見詰めた時、ミロはもう間近に戻ってきていた。長い葡萄の房が、腕の中でふわふわと揺れている。

「ほら。甘酸っぱくて美味しいよ。まだ沢山ある」

「十分だよ。これだけあれば・・・君は絵を描くんだろうか？」

カミュはカンヴァスに目を遣つて言った。森の風景が細かに映し出されていた。

「ああ。でも今日仕上がるよ。何が足りないのか、判つたんだ」

ミロは白い絵の具をパレットに絞り出すと、いきなり

カンヴァスに点を落とした。ゆつくりと絵の具を塗り広げていく。段々と、それは蝶の形を成していった。

「白い蝶……か——」

カミュが声を上げる。

ミロは未だ乾かないカンヴァスを二、二歩退がつて見詰めた。何とも言えない歓びが胸に沸くのを感じた。確かに、絵は完成したのだ。心から納得のいく形で。

「完成……したよ。君のお陰で——」

溜め息混じりに、ミロが言う。

「二頭だけ？」

「ううん。もう一頭描く」

ミロはその白い蝶に寄り添うようにして飛ぶもう一頭の蝶を描き入れた。湖の上を舞う、二頭の白い蝶。

二人は顔を見合せて笑った。白い蝶が東の地では何を示すのかも、全く知らないままに。

ミロの絵に、華が生まれた。もう、以前の様に物足りなく思うことはなくなっていた。

絵の中のカミュは、花であったり鳥であったり色々だったけれど、いずれもみな幻想的な色調で描かれていた。風景画でも、想像画でもない絵。そんな評が、ミロの周りにたち始めていた。

ミロはまた、絵の中にカミュを見つめる自分を描き入れることを忘れてはいなかった。

「随分と華やかになったのね」

先日の貴婦人が、目を丸くしてミロを見詰めた。

「ええ。やつと描きたいと思う人にめぐり合えたんです」

「そのようね。きつと、素敵な人なのでしようね……」

「勿論です。今まで何故一人で生きて来られたのか、分からなくなる位に。」

「そう……」

婦人は黙して並べられたカンヴァスを見詰めた。どんなにミロがその人を慈しんでいるか、一目で知れるものばかりだった。ふと視線を落とした先に、裏返された一枚のカンヴァス。婦人は何気なくその持ち主を尋ねてみた。

「この絵は？もう売ってしまったの？」

「ああ、これですか？別に売れた訳ではないんだけど、これだけはどうしてもある人にあげたいものだから」

ミロがカンヴァスを取り上げて表に返す。

これは・・・！

婦人は思わず息を呑んだ。湖の上を舞う二匹の白い蝶。夢のような美しさの裏に、ぴたりと寄り添っているのは

「綺麗ね・・・とても・・・」

けれど婦人にはその先を声にすることはできなかった。美しさの中にある種の儂さを見たのは、彼女が生きて来た年月の重みゆえかも知れない。しかし彼女には、白い蝶が死の影のようにさえ見えたのだ。

「この絵が一番気に入っているんです」

につこりと、ミロが微笑む。婦人はそう、と曖昧な返事を返すことしかできないまま、ミロの笑顔を見つめ続けていた。

三

ミロは額の上に手を遣った。少し熱い。昨日の冷え込みで風邪でもひいたのだろうか。

ミロはコートを肩に掛けると、ランプを持って外に出た。

空には三日月がかかっていた。十月に入って、月はますます澄まされた光を放つようになっていた。空気が冷たく澄んでいる。カミュは、やはり両手を水に浸して水辺でミロを待っていた。初めて会った日のように。

「カミュ・・・風邪をひくよ。こんなに寒いのに。」

ミロは自分のコートをカミュに掛けてやった。

「ミロ・・・君が寒いだろう」

「大丈夫だよ。沢山着込んでいるから」

「につこりと、ミロが笑う。カミュは同じように微笑みを返して、湖の対岸を見詰めた。」

「……もう、一月半になる。」

限界は、とうに過ぎている筈だった。良くて半月。ミロに初めて会った時、そう思ったのだ。それなのに、未だこうして此処にいる。ミロの傍にいる。

「……いつまで、私は……」

出来るなら、ずっとミロの傍に居たかった。吐息が触れ合うほど近く、寄り添っていたかった。けれど、その思いより遥かに大きな恐怖が、カミュの自由を制した。逃れることの出来ない、恐怖。

「……どうしたの？カミュ。」

ミロがカミュの長い髪を梳いてやる。そして、ふとその手を自らの口元に遣った。

乾いた咳の音。

「……ミロ！」

カミュは血の気が引くのを感じた。ミロ……まさか

「君は風邪をひいて……！」

「大したことない。すぐに直るよ」

カミュは無理矢理ミロの額に手を当てた。熱が掌に染み込んでくる。咄嗟に、カミュはコートを脱いでミロに着せ掛けた。

「ミロ……帰らなきゃ駄目だ……早く帰って、身体を温めて……！」

「カミュ？」

「……帰る！」

弾かれたように身を翻して、カミュは森の中へと走った。胸を押えて、咳き込みそうになるのを必死で堪えて駆けた。

「カミュ……！カミュ！」

ミロの叫びがカミュの後を追う。カミュを引き止める、悲しげな声。

いつの間にか、ミロの声は聞こえなくなっていた。カミュは疲れ切ったように、湿った土の上にくずおれた。激しい咳がカミュの胸を襲う。やつと闇に慣れた眼に、赤い色が映った。両手を染める、夥しい量の血。

いつの間にか頬を伝つた涙を拭いもせず、カミュは肩を震わせて泣いた。

あの夜から、カミュはぱったりと姿を見せなくなった。けれどミロには確信があった。

カミュは必ず此処に来る。二人が出会つたこの場所に。だからミロは、湖のほとりで待ち続けた。昼も夜もなく。

再び満月がめぐつてきた。会えるなら今日。そんな気がしていた。風邪はどうやらおさまつたらしい。風邪なんてどうつてことない、カミュに会えない方がつらいと、そう言つてやるつもりだった。

月が中天に差し掛かつたころ、ミロは人の足音を聞いた。枯れ枝を踏みしだく音。

やがて月の光の中に現れたのは——幾分か痩せた、カミュの姿だった。

「……カミュ!……」

ミロは思わず駆け寄つて細い身体を抱き締めていた。

「ミロ……待つことなんてなかつたのに——」

「カミュ……もう一度会えると思つてた。会つて、こうして抱き締めたかつた……」

滑らかなカミュの頬に唇を押し付けながら、ミロが呟く。カミュは、長い睫毛を伏せて、苦しげに言つた。

「ミロ……今日はさよならを言いに来たんだ。私は遠いところへ行かなければならない……もう、ここに会いに来ることは出来ないんだ。」

「……カミュ?」

ミロの青玉色の瞳が、カミュの紅玉色の瞳を凝視する。

一瞬の沈黙。

「……追つては行けない程遠い所へ……?」

やがてミロの口から発せられたのは、そんな悲痛な問いだった。何処へ、と訊きたくない筈がない。けれど何一つ自分の事を明かさなかつたカミュに、それを問う事

は出来なかった。それでも良いと、ミロは誓ったのだから。

ミロの正視に耐え切れずに、カミュが俯く。

「多分……。無理だと思う……」

「カミュ……」

ミロは何度もその名前を呟いた。そして、一生懸命涙をこらえた。涙でカミュを縛ることだけはしたくなかったから。必死になって、ミロは微笑もうとした。

「カミュ……ほんの少しの間だよ……きつといつか、また会える。僕はそう信じてる」

「ミロ……」

遠い遠いところ。生身の身体では望むことすらかなわない、遠い世界。

カミュはミロの背に回した腕に力を込めた。この日が来ることは、もう二十年も前に知っていたことだった。生まれつき制限時間を抱えた身体。だからカミュは、運命に抗おうとはしなかった。治る見込みのない結核に侵されてしまった事を、家の者にさえ知らせなかった。

それが今、初めて承らえる事を欲している。愛されて

いる命を、愛しいものとして感じている。

「ミロ……」

胸の痛みを言葉と共に吐き出すかのように、カミュは呟いた。つと、ミロの手がカミュの頬に掛けられる。そのまま、ミロは自分の唇をカミュの唇へと重ねた。

一瞬、嗅覚を擦る血の匂い。

「……カミュ？」

凍りついたような、カミュの表情。

「君は……まさか——」

カミュはゆっくりと後ずさった。震える身体を叱咤して、押し出すように言った。

「胸を……煩っている。君はこれ以上私の傍にいてはいけないんだ……早く行って……病がうつらないうちに——」

「カミュー」

ミロはたまらなくなつて、カミュの身体をかき抱いた。カミュが抗う様を見せる。構わずミロは唇を重ねていった。カミュの口許を、透明な唾液が伝う。

「ミロ……いけない……君まで病に侵されてしまう……」

「カミュ、今はそんな事を言わないで・・・今日だけ、今夜だけだから——」

ミロが再び唇を重ねていく。忍び寄る死の影に追われるようにして、二人は舌を絡め合った。いつまでも、お互いのぬくもりを確かめ合うように、抱き合っていた。

四

一か月が過ぎた。別れ際、カミュは胸の療養に行くことに告げた。本当かどうかは分からない。けれどミロは信じていたかった。カミュの生きようとする力を。

ミロは毎日のように教会に通った。カミュの全快を祈る為だった。

そして、そんなミロを見守る二つの瞳があった。

——時が、もうそこまで来ている・・・——

ノエルは祭壇の前にぬかづくミロの姿を見て溜め息をついた。

ミロがノエルにと持ってきた湖の絵。初めて見た時、ノエルもまた愕然としたのだ。

戯れる二頭の白い蝶。白は清らかな霊を表し、蝶は死者の魂を示す。ミロがそんな東洋の言い伝えなど知る筈

もなかったが、ノエルは確かにその絵に暗示的なものを感じた。

そして同時に、ミロがどんなに彼の白い蝶を想っているのかも。

——ミロのとき澄まされた感性が、想い人を白い蝶の形に変えた。だとしたら——

その人の死期が近いのに違いない。

ノエルはもう一度深い溜め息をつく、と、礼拝堂の外へと足を運んだ。

「……神父様。」

入口の階段を下りた所で、ノエルは黒衣の婦人に声を掛けられた。まっすぐにノエルを見詰める瞳は、泣きはらしたように赤く腫れている。

「どうなさいました……?」

静かに、優しい声でノエルは訊ねた。

「私の……息子が今日他界しました。お葬式をお願いしたくて、参りました」

——思いの外、毅然とした様子で婦人は言った。手袋を握り締める手が、微かに震えていた。

「わかりました。……どうぞ、お気落しなさいませんように……」

慰めるようにそう言うと、ノエルは礼拝堂の方を振り返った。

「……カミュ……」

ミロは、何度もそう呟いた。答えはない。彼は、白い天人花の花に縁取られてそこに横たわっていた。薄く紅をひいた口元以外は一つ変わらない、美しいままで。

「彼は……本当に努力したそうだよ……。病が発覚してからの一か月、薬も注射も全く受けつけない身体で、何とかして生きようと懸命だったらしい……。誰が見ても助からない命を、最後まで諦めなかったのだそうだ……」

ノエルがとぎれとぎれに言葉を紡ぐ。

「僕の……せいです。僕のせいで、カミュは無理をして……!」

「ミロ、それは違う。消えかけていた彼の命を二ヶ月以

上も承らえさせたのは、君だ。そして、彼に生きようとする努力をさせたのも——」

ミロは押し黙った。ノエルの言うことが解らない訳ではなかった。けれど、カミュは死んだ。望みのないものに望みを懸けるという、最も辛い努力をしたまま。

——でも、もう君を苦しめるものは何もない——

カミュの苦しみは終わったのだ。ミロは深く溜め息を付いた。人知れぬ所で病と闘ってきたカミュ。誰にも知られずに死を迎えようとする思いは、一体どんなものだったのだろうか。

せめて、幸せになつて欲しい。光に包まれた天界で。

ミロは光の差す天井を見上げて言った。

「ノエル……貴方は以前、新しい大聖堂の壁面画を描く画家を捜していると言っていましたね……その仕事、僕に任せてもらえませんか。何も報酬は要らないから」

「ミロ……」

「僕がカミュの為に出来る事と云ったら、その位ですか。ら。」

ノエルはやるせない思いでミロを見詰めた。とうとう、

期は熟したのだ。ミロの心を、深く、鋭く切り裂いて。

ならば描く場所を与えてやらねばなるまい。ノエルはそう思った。

「わかった……頼むよ、君に……彼の霊を存分に弔つてあげなさい……」

ミロが、寂しい微笑みを返す。

「有り難う……ノエル。」

ミロは、寝食を忘れて描き続けていた。上を向いたままの仕事。画家の命を縮めると言われる最も過酷な仕事を、ミロは殆ど休みも取らずに続けていた。大聖堂を訪れる者はいない。壁面画が仕上がるまで、ミロが厳しく立入禁止を言い渡しているためだった。

ノエルでさえ、ミロは内部に入れなかった。もしノエルに中を覗くことが出来たなら、彼はすぐにミロを止めたであろう。それくらい、ミロは体力を使い果たしてしまっていた。

いつの間にか、外界は十二月に入っていた。ステンド

グラスの間から、忙しそうに走り回る人々の姿が見る。筆を休めるほんのひとときの間、ミロはそんな街角の風景に目を遣つて楽しんだ。まるで、自分には全く関係のない事であるかのように。

広い大聖堂の中は、まるで氷の城の様に冷たかった。悴む手をこすり合わせて、ミロは再び筆をとる。幾度か、乾いた咳が喉を突いた。微熱が、もう一週間近く続いている。

大聖堂に籠つて三度目の満月が訪れた時、ミロは初めて天窓を開け放つてみた。吹き消されたランプの代わりに、白い光が大聖堂の壁面を照らす。旧約聖書の様々な物語が、色とりどりの絵の具で記されていた。

そして、目の前には昇天図。正面の十字架と丁度向き合う正反対の位置に、ミロは昇天図を配することにした。全ての人の注意が集まる場所。その中心の天使を残して、壁面画は全て完成していた。

突然、ミロは激しく咳き込んだ。胸に、刃物で刺され

たかのような激痛が走った。鮮血が一筋、口元を伝う。もう一度深く咳き込んで——ミロは大量の血の塊を吐いた。重度の貧血で、一瞬視界が暗転する。

血を吐いたのは、今日が初めてではなかった。

——あと少し……。せめて、日が昇るまで——

ミロはさすがのように天を見上げた。空には、眩しい程の満月。初めてカミュに会った日と同じ——
手を染める紅と同じ色の絵の具を筆に含ませて、ミロは再び壁面に向かった。

その日、何故かノエルは未明のうちに目覚めた。胸騒ぎが胸をつく。眠るに眠れず、ノエルは東の空が白むのを待つて外に出た。先月出来上がったばかりの大聖堂へ足を運ぶ。ミロが、ノエルが止めるのも聞かずに泊まり込みで仕事をしている大聖堂だった。

ふと、ノエルは裏口の石段に目を留めた。昨晚、子供

たちに届けさせた食事が、手付かずのまま置かれていた。よぎる不安の影。ノエルは、胸騒ぎを抑え切れずに戸口を叩いた。返ってくるのは沈黙だけ。

「ミロ！」

開かれた天窓に向かって、ノエルは叫んだ。水色に染まり始めた空に、ノエルの声が吸い込まれていく。

意を決して、ノエルは戸口の錠を開けた。重い木の扉が、音もなくゆつくりと開いた。

「ミロ！返事をして欲しい。嫌なら中へは入らないから！」

けれど、何一つ返事は返って来なかった。高い天井を備えた聖堂に、ノエルの声が響いて反響する。ノエルはそろそろと中へ足を踏み入れた。ランプの消えた聖堂内部は、まだ暗い。

「ミロ・・・？」

ノエルは脚立でしつらえた台の上の人に声をかけた。眠っているのだろうか。

「ミロ、そんな所で——」

その時、朝の風が天窓から滑り込んできた。白い法衣

の裾を、風がふわりと揺らす。

その風に混じるある匂いに気づいて、ノエルははっと身体をすくませた。

血の匂い？！

「ミロ！」

ノエルは急いで脚立を登った。黄金の髪を波打たせて、ミロが横たわっている。最上段まで上りつめた刹那、ノエルは彼の慈しんだ者の身に起こった全てを悟った。

たちこめる血の香り。白かったタオルが、染めぬいたような紅に染まっていた。ブラウスも、手も、細い黄金の髪も。

「ミロ・・・ミロ・・・！」

吹きながら、ノエルは震える手をミロの頬に伸ばした。指先が、血の気を失った肌をいとおしむようにたどる。もう、微かなぬくもりも感じられなかった。

「何て事を——・・・」

涙が、ノエルの頬を伝う。一粒、二粒、雫が落ちてミロの頬を濡らす。そんなノエルの涙も知らぬ気に、ミロはうつすらと口元に微笑みを浮かべたまま眠っていた。

誰にも邪魔される事のない、静かな、幸せな眠り。

光に包まれた早朝の大聖堂は、何事もなかったかのよう
に静まり返っていた。ノエルは静かに眠るミロの傍ら
に膝をついたまま、いつまでも壁面画を見詰め続けてい
た。

清々しい朝の光が、聖堂の中まで差し込んできた。太陽が昇ったのだ。

ノエルは涙に濡れた面をゆつくりと上げて——そして初めて見た。ミロが残した思いの全てを。

——赤い髪のこと・天使……！——

中央の十字架と正反対の位置に配された、昇天図。地上の人の魂を迎えるため、光輪を抱き、天翼を広げ、微笑みと共に手を差し延べる天使——。

それはまさしく、あの赤い髪の青年の姿だったのだ。

「ミロ……君はそんなに……」

ノエルは魂を失ったように天使を見つめ、それからミロの幸せそうな横顔を見詰めた。

赤い髪の天使に救いを求める床上の人は、ミロ自身なのだろうか……。

おお静かな眠りよ
その羽根を忘却の川に浸し

私の顔にそれを広げよ
私の胸にそれを広げよ

Bagna le piume in Lete
o placido placido sonno
e me le spargi in volto
e me le spargi in sen.

Quoted from TARTINI concerto for
violin in E minor, 2nd movement.

epilogue

サガは、またひとつ大きな溜め息をついた。

「この昇天図は・・・近日中に取り外さなければならぬ
いんです」

不意に背後から、ひどく残念そうな声が聞こえた。ノ
エルだった。

「何故です？」

驚いた表情を隠さないまま、サガが問う。

「教会からクレームがついたのです。赤い髪は不吉だと。

それと実在の人物をモデルにした事も・・・」

「それだけの理由で、この名作を？」

サガは耳を疑うように首を心持ち傾げて、ノエルを見
詰めた。

「ええ・・・。私にとつて、この絵には単なる壁画で

形もなく消え去ってしまった。まるで、天使の音楽が聞

こえてくるかのような空間。とりわけ、中央の昇天図は

素晴らしかった。赤い髪の天使の微笑みを見詰めている

と、胸を締め付けられるような気持ちになる。訪れる人

の涙を誘わずにはおかないという噂も、当然と言えた。

それが、命を代償に描かれたものならばなおさら――。

「それで、取り外した後は？」

「近くの美術館が引き取ると言ってくれています。けれ

ど・・・」

ノエルはそこで押し黙った。涙を堪えている様だった。
「・・・そうですね・・・。この絵はここにあるからこそ意味がある。こここの空気が、この絵と見事に調和しているのです」

今まで、霊の存在など信じたことのないサガであった。けれどこここの空気には、それが感じられた。天使を思う地上人の魂が。

「ここを・・・この聖堂を協会に譲っていただく訳にはいかないでしょうか」

不意に、サガがそう呟いた。

「・・・えっ?」

「この聖堂を、そつくりそのまま。代わりに、これと同じ規模の聖堂を立てさせます。こここのすぐ隣にでも。」

「シャルパンティエさん・・・」

ノエルが、信じられない、という様にサガを見る。

「貴方の思いとはまた違うでしょうが・・・私もこの至宝を失いたくないのです。恐らくこれ以上の絵にめぐり合えることは、生涯ないでしょう」

サガがにつこりとノエルに微笑み掛ける。ノエルも心

から嬉しそうに微笑みを返した。

「有り難うございます・・・」

誰もいなくなつた聖堂で、サガはもう一度昇天図を見上げた。

手を差し伸べる天使。

その手を取ろうとする床上の人。

気が付くと、頬を暖かいものが伝つていた。

——随分と高い買い物をしたものだ・・・。——

独り、サガは苦笑する。けれど後悔はなかつた。この、悲しい程に美しい魂たちを、守る為なら。

午後の光が、やわらかく聖堂の内部を照らし出す。サガは時を忘れて壁面画を見上げたまま、いつまでもその光の中に佇んでいた。

題名 「遙かなる 歌」

著者 祥曲 星祈 (sforzato)

初出 「遙かなる 歌」に掲載

この作品の二次配布は、以下の条件を満たす場合に限り自由ですが、著作権は放棄していません。

- 1) 改変、抜き出し等いかなる形の変更も行わないこと
- 2) 著者名及び下記サイト URL を明記すること
- 3) 無償であること

引用等については下記サイトからお問い合わせ下さい。

サイト URL

<http://moo-and-mole.com/waltz/>